
賢者の力が消える時

湯たぽん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賢者の力が消える時

【Nコード】

N0627S

【作者名】

湯たぽん

【あらすじ】

生まれながらに特別な力を持っていた私。

常に、無意識に発動する力となんとか向き合いながらも、
”普通”に生きる事を夢見ていた。

・・・つい、昨日までは。

「賢者の力の使い道」の続編です。

今作から読み始めた方でも分かるように書いていますが賢者の力の

内容に関しては具体的に言及しておりません。
「消える時」で賢者の力を想像して、「使い道」で答え合わせをしてみると面白いかもしれませんね。

その1

私には、特別な力がある。

この力があって良かったと思う事もあった。
でも、自分の意思とは無関係に働くこの力を憎く思った時期もあった。

そもそも、この力は自分のものではない。

授けられたものであるこの力は、早く使い切るべきもの。

早く力を使い切って、普通に生活できる日々を夢見ていた。

本来、力が無くなる事は私にとって喜ばしい。

そう、昨日までは思っていた。

「おーい、スズナ。おかゆだよ」

家の方からレイの声がする。

良き夫である彼のお手製おかゆが、庭のリンゴの木に吊るされたハ
ンモックへと運ばれてきた。

「・・・梅干し入ってる？」

「ああ、しっかり入れてあるよ。スズナって風邪引くと急に好みが

渋くなるよな」

わけ知り顔で、レイ。彼と付き合いはじめてから今まで、私は風邪をひいた事はないはずだ。

とある劇団で女優をしていた私を公演のたびに口説きに来ていた時も、

今と同じように私の事を誰よりも知っているようにふるまっていた。

そんなレイの愛情に満ちた視線を浴びながら、私はいまだに迷っていた。

私の力が無くなった事を、打ち上げるべきか否か。

物心ついた頃から、自分の意思とは関係なく常に働いてきたこの力。それが働かなくなった時、本来喜ばしいはずの事を私はレイに伝える事ができなかった。

常に自分と共にあったものが失われた。

何より、私にこの力を授けてくれたのは私の両親だ。その虚無感は想像していたよりもはるかに重かった。

そして、レイ。

私は特別な力を使う事で、劇団の主役をやらせてもらっていた。おかげで、劇団のファンだった彼と結婚できたのだ。

それが無くなった時、彼はまだ私を愛してくれるだろうか・・・？

そんな、私の心配をよそに

レイは着々と出かける準備をしていた。

冷えないように暖かいコートとマフラーを持って、再びこちらに近づいてきた。ああ、やっぱり靴は用意していない。

「さあ、医者に行くよスズナ」

「・・・」

コートを着せマフラーをかけると

ハンモックから私を抱きあげ、当然のように地面へ下ろそうとするレイ。私は靴を履いていないのに・・・。

「・・・何？スズナ」

無意識に腕に力をこめていたようだ。中途半端なお姫様だっこのような形で私たちは静止していた。

リングの木の下で、背の高いレイに抱かれた私は、傍から見ればさぞかし絵になっていただろう。

とはいえ今はそれどころではない。不思議そうに私を見つめるレイに向かって、私は顔を真っ赤にしながら

「おんぶ・・・おんぶして病院連れてって」

子供のような要求をした。

一瞬、ぽかんと口を開けて間の抜けた顔をしたレイだったが。

がばっ

すぐさま要求通り私をおんぶすると、何故か嬉しそうに駆け出した。「わ、ちょ、レイ！ ゆっくりでいいから・・・！」
しかしレイは速度を落とすどころか、スキップするように大きく身体を揺らしながら走っている。

自宅の庭を出ると、さすがに人目を気にしたのか足をゆるめ歩き始めたレイだったが
相変わらず機嫌は絶好調のようだ。

「・・・愛する妻が風邪ひいてるってのに。」

「ん？ 何か言った？」

背中をにらまれても何も動じないようだ。この・・・！

「スズナさ」

「・・・何」

「たまには、風邪ひいても良いよ？」

「もう二度とひかない！」

リゼンブルのリンゴ並木を、周りの視線をすべて集めながら
私たちは、病院へ・・・

「え？ レイ、道違うよ。病院は左」

病院への分かれ道を、違う方向に行きながらもレイは足を止めなかった。

さっきまでにやけっぱなしだった顔がいつの間にか緊張したように引き締まっている。

この道の先は、まさか・・・！

「嫌！レイ、そっちじゃない・・・！」

「良いんだ、こっちで」

泣き叫びながら背中から降りようとする私。だが、レイはそれもさせず早足で病院から遠ざかる道を歩いて行った。

その2

「入るよ、スズナ」

「・・・」

予想通り、たどりついたのはリゼンブルの市立学校だった。

日曜日だったので門は開いていなかったが、顔なじみの私たちはすんなり中へ通された。

無言のまま誰もいない廊下を進むと、窓の外まではみ出そうなほど本が積み上げられた研究室が見えてきた。

研究室の表札には、

「錬金術研究室

室長…シノ・グラン」と書かれていた。

「・・・ん？」

中に入ると、分厚い眼鏡にぼさぼさの短髪頭、そしてこれだけは清潔にと気を遣っているであろうシワ一つない白衣。

誰が見ても学者だと分かるシノさんが机にかじりついていた。

「こんにちは、シノさ・・・」

「あー！もうこれだから！」

突然、こちらの挨拶をさえぎると、シノさんは机の上で発狂したように頭をかきむしり始めた。

「これだから！これだから新婚は！なーにおんぶされていちゃいやと人の研究室に遊びに来ちゃってるんだ！」

やおら立ち上がると、横にあった本の山を崩し山の下から出てきた椅子を二脚、私たちの方に出してきた。

「仲が良くて何よりだね！まったく。」

同じく本の山から発掘されたコップにポットのコーヒーを入れ、差し出してくれた。

歓迎してくれてはいるんだろうけれど・・・、30代も後半にさしかかって独り者のシノさんには私たちの姿は若干不愉快だったようだ。

「で？どうしたの突然に」

いつの間にかちょっと心配そうな顔に切り替わったシノさんが、レイにおんぶされたままの私を覗きこんできた。

「ほら・・・スズナ」

背中を降りるようにながすレイ。

「気づいてたのね・・・」

床に降りて、椅子につくと

「え・・・？」

信じられないものを見たかのように私を見つめ

「スズナちゃん・・・まさか・・・」

力が・・・無くなったのかい？」

シノさんはすぐに私の異変に気がついたようだ。

そう、私の力は特異ではあるが、錬金術の一種だったのだ。

伝説の、巨大な錬金術の力を内包しているとされる賢者の石を、私は両親によってこの身に受けて産まれてきた。

そして、このシノさんは錬金術師。自分では大した力ではないと言っているが、学校の教職を得て

思う存分研究に没頭し、いくつか出した論文も高評価を得ているやり手だ。

私の力を詳しく解析し、錬金術と賢者の石の関係を私に教えてくれたのもシノさんだ。

「そうなんです。昨日の夜あたりから体調を崩して、今朝になって・・・」

私の代わりに、レイが答えた。

「シノさんなら、何か分かりませんか？力が無くなるのは喜ばしい事だけれど

それがスズナの身体にさわるようだったら・・・と思って」

私の心配をあっさりと打ち崩すと、レイは私の肩を強く抱きながらシノさんに詰め寄った。

「そうか・・・。確かに、力がなくなるのは良い事だらけとは限らないね

伝説の賢者の石に関する力となると役に立てるかどうかわからないが・・・」

そう言うと、シノさんは机の周りをぐるりと回り、私と膝合わせで向かい合った。

「今期から錬金術と医学の連携について研究していてね。人の身体

を少しだが診れるようになったんだ。

「ちょうど良かった」

なんだか頼もしく見えるようになったシノさんは、私の脈を取ったり眼を剥いたり

患者というよりは実験対象を見るような目で私の身体を調べ始めた。

「これは・・・確かあっちの棚に・・・」

分厚い医学書を何故か足元から拾い上げ、しばらく唸りながら見入った後・・・

「・・・やっぱりそうか！」

シノさんがあまり真剣に調べてくれるので、せっかくのコーヒーにも口をつける事無く私たちは見守っていた。

そこへバン！と勢いよく医学書を閉じたシノさんがようやくこちらへ向き直った。

「スズナちゃん、レイ君・・・」

向き直ったシノさんの顔は、何かを必死に我慢しているように見えた。

「スズナちゃんの体調の事は、私の手には負いかねる」

顔の筋肉を緊張させたまま、シノさんは手元にあったメモにペンを走らせた。

「今すぐ、この住所の医者へ行きたまえ。ここでならうまく・・・うん、大丈夫だろう」

最後の言葉を濁し、メモをレイへ差し出す手は震えていた。

「だ・・・大丈夫なんですか、スズナは」

ただならぬシノさんの気配に、レイがたまらず声を上げる。

「・・・ああ、すまない。大丈夫だ。絶対大丈夫。だから早く行きなさい」

シノさんは顔をそむけ手で隠し、手の平を返して急げと合図している。

私達は挨拶もそこそこに、シノさんの研究室を飛び出した。

その3

「急ぐよ！スズナ」

シノさんの研究室を出るや否や、再び私を背負ったレイは必死の形相で走り出した。

私自身もさっきのシノさんの表情が頭から離れない。

あんなに、必死に何かに耐える表情をする人を私は見た事がない。

何か・・・あるのだ。やはり、私の身体に・・・

「1番街・・・タルカス通り・・・！」

レイがシノさんが書いてくれたメモを見ている。

朝、はじめに行こうとした大病院と方面は同じだが、違う場所のようだ。

来た道をいったん戻り、私が騒ぎだした分かれ道まで来たところで、レイはいったん立ち止まった。

「・・・まさか、この住所って・・・」

「何？知ってるお医者さんなの？」

背中から乗り出して、メモとレイの顔を交互に見比べていると

「・・・！？」

レイの顔つきも変わっていた。

さっきの・・・シノさんと同じ表情だ！！

無理矢理顔中の筋肉を収縮させたように・・・何かに耐えている！

「ねえ！この住所どこなの！？私どこに連れて行かれるの！？」
突然無言になって走り出したレイの背中で、私は叫んだ。

「大丈夫！絶対大丈夫だから！暴れないで！」
シノさんと全く同じ言葉をレイも繰り返している。
彼らは一体私の何を知ったのだろう・・・！

「・・・・・・あ・・・・・・」

頭上の看板を見て、私が我ながら間抜けな声を出したのと
レイが足を止めたのはまったくの同時だった。

「はぁ・・・はぁ・・・ここだよ。スズナ・・・」
さっきまでとは全く違う表情で、レイ。

笑っていた。今まで見た事もないほど嬉しそうに。

再び私が上を見上げると、そこには

「産婦人科」、と書かれていた。

「赤ちゃんだよ！僕らの子供ができたんだ！」

大きな通りのど真ん中であるにも関わらず、レイは私を背負ったまま大声で叫んだ。

「そっか・・・そうだったんだ・・・」

体調を崩したのも、急に食べ物のお好みが変わったのも、新しい命が私の中にできたからだだったのだ。

「うわー、シノさんの気持ち今分かったわ。こりゃ我慢するの大変だっただろうにな！」

シノさんとレイは、2人とも喜びが顔に出るのを必死で耐えていたのだった。

レイは相変わらず私を背負ったまま、通りをとび跳ねまわった。人通りが多少ある時間なので、恥ずかしいと思ったらないけれど・・・

私は私で、一生懸命子供の名前を考えていた。

エドワード・・・ちよつと強すぎな名前かしら。賢者の力が宿っているからさぞかし強い子ではあるんだろうけれど・・・

シンプルにリン。悪くないかも。

・・・あ、男の子とは限らないか。ん・・・ミラ。いやもうちよつと暖かい名前がいいな。

病院の受付にも行かずに2人ではしゃいでいるうちに、通りの向こ

うからシノさんもやってきていた。

「やっぱり、賢者の力が赤ちゃんの方に宿ったようだね」
私の力は賢者の石によって引き起こされていたのだが
それが私の中の子供にうつった事で、力が消えたのだ。賢者達にと
っては孫にあたるのだから・・・

「これから、忙しくなるね」

満面の笑みを浮かべながら、ようやくレイが私を下ろした。
生まれて初めて、”普通に”地面に立てた。その事すら忘れるほど
の幸福感が私を包んでいた。

錬金術よりも、賢者の力よりも。

家族の絆って、何よりも強いのかも知れない。

おしまい。

その3（後書き）

賢者の力が消える時、これにて完結です。いかがでしたでしょうか。

「賢者の力の使い道」を書いた後、スズナに宿った賢者の力はいつ消えるのかな・・・と考えていて思いついたお話です。

スズナにとっても周りの人達にとっても、赤ちゃんに宿った2人の賢者にとっても

ハッピーな終わり方にできたんじゃないかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0627s/>

賢者の力が消える時

2011年4月16日18時43分発行